

『躬恒集』注釈（十五）

平沢竜介・嶋田陽子・玉木紗也香・
中井瑞葉・渡辺優子

左

767 心こころにもまかせぬなかに人ひとしれず思おもひかよはすことはまされり

くろぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○心にもまかせぬ―思い通りにならない。○人しれず―恋の相手に知られない。

【通釈】

左

くろぬし

思い通りにならない仲で、相手にも知られないで思いを寄せることは勝っている。

【類歌・参考】

百首歌たてまつりし時

入道前太政大臣

こころにもまかせぬ水のみなかみはうきになかるる涙なりけり
(続後拾遺和歌集・卷十二・恋二・七六一)

(百首歌たてまつりし時)

後三条入道前太政大臣女

心にもまかせぬ物はつれなくてうきにたへたる命なりけり
(新続古今和歌集・卷十八・雑中・一九二二)

(寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける) ふじはらのかちおむ

ひとしれず思ふ心は春霞たちいでてきみがめにも見えなむ
(古今和歌集・卷十八・雑・九九九)

女のもとにつかはしける
藤原惟成

人しれずおつる涙のつもりつつかずかくばかりなりにけるかな
(拾遺和歌集・卷十四・恋四・八七八)

右

とよぬし

768

つくづくくと契ちぎりしほどもすぎゆくまに待まてどもみえぬこひ恋はまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○つくづく―よくよく。しみじみ。ひたすら。

【通釈】

右

とよぬし

よくよく約束した時も過ぎていくのに、待っても恋人が来ない恋は勝っている。

【類歌・参考】

題知らず

柿本人麿

あをやぎのかづらにすべくなるまでにまてどもなかぬうぐひすのこゑ

(続後撰和歌集・卷一・春上・四五)

(別の心を)

正三位知家

はかなさのいのちもしらぬ別ぢはまてどもえこそちぎらざりけれ(続後撰和歌集・卷十九・羈旅歌・一二八四)

左

くろぬし

769

つれもなき人ひとに思おもひをつけそめて身みのみ焦こがることはまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○つれもなき人―冷淡な人。薄情な人。○思ひ―「思ひ」に「火」が掛けられている。「火」と「焦がるる」は縁語。

【通釈】

左

くろぬし

薄情な人に思いを寄せ始めて、自分の身ばかり焦がることは勝っている。

【類歌・参考】

題しらず

読人しらず

つれもなき人をこふとて山びこのこたへするまでなげきつるかな (古今和歌集・卷十一・恋一・五二二)

題しらず

むねゆきの朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもはおかなむ (古今和歌集・卷十五・恋五・八〇二)

撰政左大臣家にて恋の心をよめる 源雅光

あやなくにこがるるむねもあるものをいかにかわかぬたもとなるらむ (金葉和歌集二度本・卷七・恋上・四一三)

文保百首歌たてまつりける時 正二位隆教

いへばえにこがるるむねのあはでのみ思ひくらせるけふのほそ布 (新千載和歌集・卷十三・恋三・一三二四)

右 とよぬし

770 燃ゆる火に身は燃やすとも人恋ふる胸の炎はなほまさりけり

【他出文献】

ナシ

【通釈】

右

とよぬし

燃える火にたとえ我が身を燃やしたとしても、人を恋する胸の炎はやはり勝っていることだ。

【類歌・参考】

(寛平御時きさいの宮の歌合のうた)

紀つらゆき

君こふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえなまし

(古今和歌集・卷十二・恋二・五七二)

(題しらず)

つらゆき

涙にも思ひのきゆる物ならばいとかくむねはこがさざらまし

(後撰和歌集・卷十・恋二・六四四)

題しらず

(伊勢)

身のうきをすればはしたになりぬべみおもひはむねのこがれのみする (後撰和歌集・卷十八・雑四・一二七五)

(題しらず)

(読人しらず)

篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきてもゆらむ

(古今和歌集・卷十一・恋一・五二九)

(題しらず)

みつね

夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひにもえぬべらなり

(古今和歌集・卷十二・恋二・六〇〇)

右

771 身ひと一つを千千ちやくの劍けんにさすよりもしばしもの思おもふことはまされり

くろぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○千千の劍―沢山の劍。○しばし―少しの間。

【通釈】

右

くろぬし

我が身一つを沢山の劍にさすよりも、少しの間恋の物思おもいをすることが勝かつている。
▽恋の物思おもいの方が沢山の劍で身をさすよりも辛い。

【類歌・参考】

これさだのみこの家の歌合によめる

大江千里

月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど（古今和歌集・卷四・秋上・一九三）

地獄絵につるぎのえだに人のつらぬかれたるを見てよめる 和泉式部

あさましやつるぎのえだのたわむまでこはなにの身のなれるなるらん（金葉和歌集二・度本・卷十・雑下・六四四）

右

772

かぎりなき人^{ひと}をわかれてまたとだにあひ見^みぬほどの恋^{こひ}はまされり

とよぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○かぎりなき―この上ない。

【通釈】

右

とよぬし

この上なく恋しい人に別れて、もう一度さえ逢えない時の恋は勝っている。

【類歌・参考】

返し

時わかぬ松の緑も限なきおもひには猶色やもゆらん

(よみ人しらす)

(後撰和歌集・卷十二・恋四・八三五)

円融院御時、少将更衣のもとにつかはしける

(藤原有時)

限なき思ひのそらにみちぬればいくその煙雲となるらん

(拾遺和歌集・卷十五・恋五・九七一)

花の歌とてよめる

平行氏

又とだに老いてたのまぬ別にはいよいよちるもをしき花かな

(続千載和歌集・卷十六・雑上・一六八七)

左

くろぬし

773 かぎりなく頼むたのむに人のあだ心ひとつくを思おもふはなほなほまさりけり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○頼む―頼りにする。○あだ心―うわついた心。浮気心。

【通釈】

左

くろぬし

この上なく頼りにしているのに、その恋人が浮気心を持つのを思うことはいっそう勝っている。

【類歌・参考】

(みちのくうた)

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ

(よみ人しらず)

(古今和歌集・卷二十・東歌・一〇九三)

(題しらず)

すゑの松あだし心の夕しほにわが身をうらと波ぞこえぬる

信実朝臣

(続千載和歌集・卷十五・恋五・一五四八)

かぐや姫いはく、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後くやしき事もあるべきをと、思ふばかり也。世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らでは、婚ひがたしと思ふ」と言ふ。(竹取物語)

右

とよぬし

774 わするれどわすれわびぬる人をなほ恋しと思ふことはまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○わすれわぶー忘れることが出来なくて困る。忘れかねる。

【通釈】

右

とよぬし

忘れたいと思つても忘れられない人をやはり恋しいと思うことは勝っている。

【類歌・参考】

あつよしのみこの家にやまとといふ人につかはしける 左大臣

今更に思ひいでじとしのぶるをこひしきこそわすれわびぬれ (後撰和歌集・卷十一・恋三・七八八)

なき人のくしのあるをみて 前大納言忠良

行へなき玉のをぐしも形見にて猶そのかみを忘れわびぬる (新後拾遺和歌集・卷十七・雑下・一四六九)

〔弘安百首歌〕

大蔵卿隆博

いかにせんわすれわびぬる恋しさの身をしはなれぬ心よわさを (新続古今和歌集・卷十五・恋五・一五一)

775 わびしさは思おもひも恋こひも劣おとらぬを深ふかき浅あさきのほどにやあらぬ

みつね判す

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○判す―判定する。判断する。○を―強調を表す間投助詞。

【通釈】

みつねが判定する

辛さは思いも恋も劣らない。その思いや恋の深さや浅さの程度によるのではないか。

【類歌・参考】

建保三年内大臣家百首歌に、名所恋

前中納言定家

あしのやにほたるやまがふあまやたく思ひも恋もよるはもえつつ (続後撰和歌集・卷十四・恋四・九一五)

題しらず

贈太政大臣

ふかき思ひそめつといひし事のはいつか秋風ふきてちりぬる

(後撰和歌集・卷十八・雑四・一二七三)

ならに侍従と申しけるわらはの、いづみ川にみをなげて侍りければよめる

僧都範玄

なにごとのふかき思ひにいづみ川その玉もとしづみはてけん

(千載和歌集・卷九・哀傷・五九六)

《三月三日紀師匠曲水宴序による補遺》(『日本古典全書 土佐日記』による)

花浮春水

776 やみがくれ岩間を分けて行水の聲さへ花の香にぞしみける

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○やみがくれ―闇に隠れて。

【通釈】

花浮春水

闇に隠れて岩の間を分けて流れ行く水の音までも、花の香りに染まっていることだ。

【類歌・参考】

題不知

平兼盛

たにがはのいはまをわけてゆく水のおとにのみやはきかむとおもひし

(詞花和歌集・卷七・恋上・一九二)

題しらず

赤染衛門

消えはてぬ雪かとぞみる谷川のいはまをわくる水のしら波

(玉葉和歌集・卷十五・雑二・二〇六五)

月入花灘暗

777 とくも入る月にもある哉山のはのしげきに影の隠るとやいはむ

【他出文献】

ナシ

【語釈】

- 月入花灘暗―月が花に入ってしまったて灘が暗い。○とくも―はやくも。いそいで。
○山のは―山の稜線。山の空に接する部分。○しげき―草木が生い茂っている。
○影―月あるいは月の姿。

【通釈】

月入花灘暗

早くも入る月であることだなあ。山の端に木が生い茂っているのでその姿が隠れたと言おうか。

【類歌・参考】

屏風のゑに

つらゆき

つねよりもてりまさるかな山のはの紅葉をわけていづる月影
(拾遺和歌集・卷八・雑上・四三九)

題不知

加賀左衛門

やどごとにかはらぬものは山のはの月まつほどの心なりけり
(後拾遺和歌集・卷十五・雑一・八四三)

おもふことありけるころ山でらに月をみてよみ侍ける 源為善朝臣

山のはにいりぬる月のわれならばうきよのなかにまたはいでじを
(後拾遺和歌集・卷十五・雑一・八五七)

躬恒がもとにまかりて、つとめて

778 散らぬほどに一枝もがな桜花君がかたみに今朝みまくほし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○まかりて―「行く」の謙讓語。○つとめて―翌朝。

○もがな―願望を表す終助詞。「〜があるといいなあ」「〜であったらいいなあ」。

【通釈】

みつねの家に行つて、その翌朝

散らない間に一枝贈つてほしいのものだ。桜花をあなたの形見として今朝見たいことだ。

【類歌・参考】

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらず

梅がかをそでにうつしてとどめてば春はすぐともかたみならまし

（古今和歌集・卷一・春上・四六）

(題しらず)

きのありとも

さくらいろに衣はふかくそめてきむ花のちりなむのちのかたみに

(古今和歌集・卷一・春上・六六)

ふぢばかまをよみて人につかはしける

つらゆき

やどりせし人のかたみかふぢばかまわすられがたきかにほひつつ

(古今和歌集・卷四・秋上・二四〇)

躬恒返し

779 わが恋ひて見むとな云ひそ桜花ふりにし雪のかたみとを云へ

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○とを―引用を表す格助詞「と」と、強調を表す間投助詞「を」。○ふりにし―「降り」に「古り」を掛ける。
○雪―雪を白髪に見立てるか。

【通釈】

躬恒の返し

桜花を私を恋慕つて見ようと言わないでください。桜花は降った雪の形見と言ってください。

▽桜を私の形見にするなどと言わないで下さい。私は降った雪、つまり年老いた白髪の老人なのですから。

【類歌・参考】

若菜をよめる

按察使顕朝

いつまでかふりにし雪の消えやらで野べのわかなもしたもえにせん (新統古今和歌集・卷一・春上・五二)

題しらず

よみ人しらず

心ざしふかくそめてし折りければきえあへぬ雪の花と見ゆらむ (古今和歌集・卷一・春上・七)

雲林院にてさくらの花のちりけるを見てよめる

そうく法師

桜ちる花の所は春ながら雪ぞふりつつきえがてにする (古今和歌集・卷一・春下・七五)

さくらのちるをよめる

凡河内みつね

雪とのみふるだにあるをさくら花いかにかれとか風の吹くらむ (古今和歌集・卷一・春下・八六)

からさき

780

浪の花沖から咲きて散りくめり水の春とは風やなるらん

躬恒

【他出文献】

(からさき)

伊勢

浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらむ

(古今和歌集・卷十・物名・四五九)

からさきにて

浪の花おきからさきて見えつるは水の春とも風やなるらん

(伊勢集Ⅱ・一一三)

からさきを題にて

浪の花おきからさきて見えつるは河の春とも風ぞ吹きける

(伊勢集Ⅲ・一一〇)

【語釈】

○からさき―近江国の歌枕。今の滋賀県唐崎。

【通釈】

からさき

躬恒

浪の花が沖から咲いて散って来るようだ。水の春とは風のことなのだろうか。

▽唐崎を詠み込んだ物名歌。浪を花と見立てる。

【類歌・参考】

(これさだのみこの家の歌合のうた)

(文屋やすひで)

草も木も色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける

(古今和歌集・卷五・秋下・二五〇)

あられのふるをそでにうけてきえけるを、うみのほとりにて

よみ人しらず

ちると見てそでにうくれどたまらぬはあれたる浪の花にぞ有りける

(後撰和歌集・卷十六・雑二・一四七)

人のかうぶりする所にて、ふぢの花をかざして

よみ人しらず

打ちよする浪の花こそさきにけれちよ松風やはるになるらん

(後撰和歌集・卷二十・慶賀哀傷・一三七四)

たつた河のほとりにてよめる

坂上これのり

もみちばのながれざりせば竜田河水の秋をばたれかしらまし

(古今和歌集・卷五・秋下・三〇二)